

(続紙 1)

京都大学	博士 (教育学)	氏名	清水 亜紀子
論文題目	「自明性の揺らぎ」に関する心理臨床学研究		
(論文内容の要旨)			
<p>本論文は、日常生活、価値観、自己観、私という存在など、普段はあたり前すぎて意識されず、疑問を抱くことすらなかったことがらが、自らの意図や意思を超えて突然揺るがされるような事態を「自明性の揺らぎ」と名づけ、そうした「自明性の揺らぎ」の中で、能動性の限界をつきつけられ、主体性が脅かされるような体験を取り上げ、体験者自身の語りをもとに検討を行ったものである。</p> <p>まず序章では、自明性の揺らぎという事態について、本論文における定義を示し、自明性の揺らぎを人がいかに体験し、受け止め、そこから立ち直っていくのか、あるいは、いかに心を使いながらそうした事態と関わり生きていくのか（あるいは関わらないのか）について検討することの、心理臨床学的意義について論じている。また、自明性の揺らぎに投げ込まれたクライアントと関わる際に、心理臨床家に求められる姿勢について考察することも目的として示された。</p> <p>第1章では、「自我体験」を素材にして、私という存在の自明性が揺さぶられる際、その事態を人がいかに体験し、心の中で受け止め位置づけていくのか、また、その位置づけ方に、その人の在りようがいかに現われるのかについて論じられている。さらに、自我体験について「語る」ことが、語り手にとっていかなる体験であるのか、その体験はいかなる意味を持つのかについて考察し、自我体験のような、その人の存在の根底を揺るがす体験を聴く際に、聴き手に必要となってくる姿勢について考察している。</p> <p>第2章では、日常の自明性を揺るがす事態として、糖尿病を取り上げ、糖尿病患者自身の語りを通して、糖尿病とその治療が、糖尿病患者が主体的に生きることをいかに難しくさせているかについて論じ、それを踏まえて、糖尿病患者が糖尿病によって主体性を奪われそうになる中で、「なぜ私が糖尿病に？」という問いを深めていくことの意義について考察された。また、「なぜ私が？」と問う者を前にした際に、心理臨床家に求められる姿勢について論じられている。</p> <p>続く第3章では、心理療法の事例を素材に、自明性の揺らぎがもたらす能動性の限界に向き合い、それを受け入れていく過程に生まれてくる変容の力について検討を行った。また、その困難な過程に伴う苦しみについても論じている。</p> <p>第4章では、心理療法の事例を素材に、心理臨床家自身が、自明性の揺らぎに投げ込まれ、それを生きることがいかなる意義を持つのかについて論じられた。</p>			

第5章では、心理療法と関わる形での総合的考察が試みられた。第1節では、「揺らぎ」という現象にあらためて注目しながら、自明性の揺らぎに関わっていく中で生まれてくる変容の力と、そうした困難な過程に伴う傷つきや痛みという観点から、続く第2節では、心理療法の場で、自明性の揺らぎを生きるクライアントに関わる際に、心理臨床家に求められる姿勢という観点から、各章で得られた知見をまとめ直し、考察が深められた。第3節では、今後の課題と展望が示されている。

注) 論文内容の要旨と論文審査の結果の要旨は1頁を38字×36行で作成し、合わせて、3,000字を標準とすること。

論文内容の要旨を英語で記入するときは、400～1,100 wordsで作成し審査結果の要旨は日本語500～2,000字程度で作成すること。

(論文審査の結果の要旨)

本論文は、日常生活、自己観、私という存在など、普段はあたり前すぎて意識されず、疑問を抱くことすらなかったことがら、自らの意図や意思を超えて突然揺るがされるような事態を「自明性の揺らぎ」と名づけ、そうした「自明性の揺らぎ」の中で、能動性の限界をつきつけられ、主体性が脅かされるような体験を取り上げ、体験者自身の語りをもとに検討を行ったものである。このテーマは、心理臨床実践のなかで、「悩み」や「症状」の訴えの底にある、たいへん重要なテーマだと考えられる。

まず序章では、自明性の揺らぎという事態について、本論文における定義が示され、自明性の揺らぎを人がいかに体験し、受け止め、そこから立ち直っていくのか、あるいは、いかに心を使いながらそうした事態と関わり生きていくのか(あるいは関わらないのか)について検討することを通して心理臨床の営みを捉え直すという重要な視点が示された。さらに、自明性の揺らぎに投げ込まれたクライアントと関わる際に、心理臨床家に求められる姿勢が予備的に提示されたが、これは心理臨床の技法論を超えた本質を捉えていると評価された。

第1章では、まず、「私」という存在の自明性が揺さぶられる事態だと考えられる「自我体験」を取り上げ、それを人がいかに体験し、受け止め、位置づけていくのか、また、その位置づけ方に、その人の在りようがいかに現われるのかという個人差が様々なパーソナリティ特性と関連づけられて詳細に論じられている。そのなかでは、「揺らぎ」に自らを委ねることで、「私」の在りようが変容していく可能性が示唆されるとともに、それは恐怖や不安を伴うものであり、自己不確実感が強い場合には、それまでの在りようにしがみつき、新たな在りように変容していくことが困難な場合があることが、ロールシャッハテストや語りの分析によって、細やかに示された。

続く第2章では、日常の自明性を揺るがす事態として「病」に目が向けられ、その一例として「糖尿病」が取り上げられている。ここでは、糖尿病患者自身の語りを通して、糖尿病患者が主体的に生きることの難しさが示されたうえで、糖尿病患者が、「なぜ私が糖尿病に？」という問いを深めていくことの意義について考察された。この問いは、傷つきや無力さに触れていくことを促すが、これは自らの能動性の限界に突き当たることであり、それこそが、自らがおかれた状況の中への内在を可能とし、新たな「私」へと変容していく可能性を開くのではないかと考察された。このように、自明性の揺らぎを通じた人間の心的変容の可能性に関して、説得力のある仮説が提示されている。

さらに第3章では、自明性の揺らぎによってもたらされる能動性の限界という事態に向き合い、それを受け入れていく過程に生まれてくる変容の力について、心理療法の事例を素材として検討がおこなわれた。事例の経過には、著者のセラピストとしての力量が読み取れることは言うまでもないが、事例を通して示されるのは単な

る概念的考察ではなく、自明性の揺らぎを人はどう受けとめ、そこからどのように変容していくのか、またそれに伴う苦しみなどが、詳細に描き出されていると評された。

また第4章では、ここでも心理療法の事例が素材として取り上げられているが、本章では、クライアントのみならず、心理臨床家自身が、自明性の揺らぎに投げ込まれ、それを生きざるを得なくなる事態について考察された。ここでは、末期がんを生きる男児とのプレイセラピーの事例が取り上げられ、傷つき、「かなしみ」を抱えて、揺らぎの中を生き抜く心理臨床家の姿が示されている。完全無欠の治療者が傷を負ったクライアントを治療するというイメージではなく、傷つき、かなしみ、揺らぎながらクライアントとともに歩む心理臨床の在りようが見事に示されていると考えられる。

本論文は、自明性の揺らぎという、人を恐怖と不安に陥れる事態について、その否定的側面だけではなく、そこに切り込み、そこから変容の力を見いだすという、力強さをもつものである。また、単に肯定的側面だけに注目するのではなく、実際の心理療法事例に基づくゆえに、そのかなしさや傷つきをも捨象することなく取り上げられ、心理臨床家自身も傍観者ではないことを示しているところに価値があると考えられる。

ただ、論考のなかでは、あくまで揺らぎのむこうに「自明性」を措定しており、書き手としての著者はむしろ揺らがず、論がやや抽象的であるとの批判が試問において出された。また、「自明性」という鍵概念の定義に厳密さが欠けているという指摘もされた。しかし、こうした批判は本研究のさらなる発展性を視野に入れたものであり、本研究の価値をいささかも下げるものではない。

よって、本論文は博士（教育学）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成23年3月15日、論文内容とそれに関連した試問を行った結果、合格と認めた。

論文内容の要旨及び審査の結果の要旨は、本学学術情報リポジトリに掲載し、公表とする。特許申請、雑誌掲載等の関係により、学位授与後即日公表することに支障がある場合は、以下に公表可能とする日付を記入すること。

要旨公開可能日： 年 月 日以降